

フィクションと自由——伊藤整における「近代日本」への問い——

菊部直

一 出発点としての「越境」

思想史と文学史の越境。これはもちろん魅力的な主題である。だが少なくとも日本研究に関するかぎり、学界における議論をとりかこむ「境」のあり方は、思想史と文学史とでかなり違うことを、まず念頭におくべきだろう。文学史研究は、一八八五（明治十八）年、東京大学文学部和漢文学科から「和文学科」（三年後に「国文学科」と改称）が独立し、独自の研究者養成課程と大学人事のための人脈を確立して以来、すでに百三十年近くがたっている。研究者養成の場も大学教員のポストも、個別の専門学会・研究会の

数もきわめて多く、先行研究の蓄積は龐大である。また、それをどう評価するかはともかくとして、かつて「国文学」の名は、日本という国家の存在感と結びつく燦然たる輝きを放っていた。

これに対して思想史研究の方はどうか。「日本思想史」「日本〇〇思想史」という名の専任教員ポストをもつ大学は少なく、日本思想史学会も歴史学・倫理学・政治学といったさまざまな学問分野の訓練を受けた研究者が混在する状況にある。いわば諸学の相乗り状態であり、全体を囲む「境」は、文学史研究を守る分厚い壁に比べれば、細い点線のようなものにすぎない。「越境」の勇ましい宣言が、思想史研究ではなく、学問世界の強者たる（？）文学史研

究の方面から登場するゆえんであろう。

しかし、近代日本思想史の研究に關してみれば、諸学のあいだの「越境」の試みは、むしろその研究分野自体が始まった原点において、盛んに展開していた。日本の近代に關する思想史研究は、昭和戦前期・戦中期の講座派マルクス主義の哲学者・歴史家や、丸山眞男による政治思想史研究の試みを先駆とするが、本格的に始まったのは戦後のことである。⁽¹⁾ その初期の達成をまとめた論集として、筑摩書房から出た『近代日本思想史講座』全八巻・別巻一冊（一九五九―六二年、第二巻「正統と異端」と別巻は未刊）がある。

この論集は、十一名の編集責任者を中心に、五、六年のあいだ合計で九十回以上もの研究会を重ねて刊行されている。その最初のプランを作ったのは、編集責任者の一人である丸山眞男であった。講座の内容見本に書いた「企画・編集にあたって」という文章で丸山は、「この講座が対象とするのはたんに思想家や学者の思想・学説だけでなく、そうした抽象を経ないいわばムードの次元にとどまるような時代の潮流や民衆の感覚、断片的な心情などが広く包含される」と説明し、執筆者には「狭義の思想史専門家や哲学者だけでなく、広く文学・歴史および諸専門科学の分野からの積極的参加を求め」たと記している。⁽²⁾ 実際に編集責任者の顔ぶれには、本稿でとりあげる伊藤整（一九〇五―

九六九）のほか、小田切秀雄、亀井勝一郎、竹内好といった文学者が加わっている。

第一巻「歴史的概観」には、丸山や小田切を含む五人の共同討論を竹内好がまとめた「講座をはじめるに当って」という文章が掲げられており、これが研究の対象となる「思想」の「内部構造」を、より詳しく説明している。その「内部構造」は三角形の比喻によって表現される。まず底辺にあたるのが「生活と未分離の、まだ思想化されないムードのようなもの、いわば下意識の領域」である。その上に「そこから昇華したバラバラの、相互に矛盾しあう觀念の累積」が乗り、さらにその上に「いくらか整序された思考のカテゴリ」、たとえば時代精神とか世界像とか階級意識とかよばれるもの⁽³⁾ が位置を占め、頂点に來ると「思想の純粹結晶である学説や理論や教義があらわれる」という。学説・理論・教義を直接に展開することの少ない文学テクストについては、時代精神・階級意識や、あるいは根柢をなす「思想化されないムード」を読みとるための資料と考えられているのだろう。

この思想の三角形モデルのうち、底辺の「思想化されないムード」「下意識」の領域に焦点をあてる試みとして重要なのは、この講座の第三巻「発想の諸様式」（一九六〇年）である。担当した編集責任者は伊藤整と清水幾太郎。

二人の連名による「まえがき」では、この巻の編集方針として、「思惟が感情や意欲から身を解き放つに至っていない場所に見出される諸問題」をとりあげようとしたと語っている^④。巻頭を飾るのは、人々の思想が大正震災から受けた衝撃を再現しようとする、清水の「日本人の自然観——関東大震災」であり、巻末には伊藤による「文体と思考様式」が載っている。

伊藤の論文の副題は、「明治の文体の変化」。主に、尾崎紅葉・森鷗外・二葉亭四迷・島崎藤村といった、明治時代後半の文学者の作品をとりあげたものであった^⑤。そこでは作品を構成する文体と一般社会に広がった意識との関係の問題にしている。たとえば二葉亭四迷の試みに見られるように、近代日本の作家たちは、西洋由来の「小説」という藝術ジャンルがもっていた、「論理的具体的な表現方法」を日本語によって確立することに苦心していた。しかし、論理性を追求する試みは「文壇」以外から評価されることなく、一般社会に受けるのは、尾崎紅葉や島崎藤村の例に見られる、文章を七五調のような前近代以来の韻律に載せることで、一種の妥協を試みた作品であった。

西洋の「近代」の思考様式の所産として「小説」をとらえ、近代日本ではそれがなかなか純粋な形では実現されず、前近代以来の日本の思考様式によって歪められた、情緒過

多な作品ばかりが横行すると見なす。広い意味でそうした近代日本文学批判は、あとでふれる丸山眞男も含め、終戦直後以来、多くの知識人が唱えていたものである。それは、戦後における民主化の実現をふまえ、制度面の改革にとどまらず「近代」の精神を確立しなくてはいけないという課題意識に即してもいた。伊藤の文体論もまた、一面ではそうした議論と共通する要素をもっている。

ただし伊藤整は、文学が情緒的な自己告白の要素を含むのは、ジェイムズ・ジョイスやマルセル・ブルーストのような西洋文学と日本の私小説との両者を貫く、「二十世紀文学」の共通傾向であったとも見ており、ひたすら近代西洋の思考様式を礼賛し、「日本」の文学傾向を批判するような姿勢はとらない。しかしそれでも、論文「文体と思考様式」では明治文学だけでなく、第一次世界大戦後のヨーロッパでの表現主義やダダイズムの風潮に学び、新たな文体を創出しようとした新感覚派の試みもまた、「古き生活にある不合理なもの、曖昧なものへの復帰」へと向かうことになり、尾崎紅葉や泉鏡花と同様の「美文調」へと墮落していったと指摘している。

これは同時に、若き日の自分に対する伊藤の反省でもあるだろう。伊藤は一九三〇年代から、横光利一ら新感覚派の一種の伴走者として、ジョイスやD・H・ロレンスによ

る新しい文学を紹介し、英国のモダニズムの文藝理論に立脚した小説を盛んに書いていた。戦後の伊藤が「近代日本思想史」の講座に文体論を発表したことは、一般社会に根づいた感覚の内にある「不合理なもの、曖昧なもの」の存在をあぶり出すとともに、みずからの戦前・戦中の仕事を振り返り、戦後に自分がその問題をいかに乗り越えてきたのかを確認する作業だったのである。

二 「フィクション」と「近代」

伊藤整は、その文学活動の初期から批評と小説の創作とを並行して行なってきた、近代日本では珍しい作家の一人である。その伊藤が戦後における再出発にさいして強調した論点の一つは、近代小説の「フィクション」としての性格であった。評論「内なる声と仮装」（一九四八年）における表現を引けば、小説はまず、作者の「エゴ」の表現として出発する。「内なる声による発想は近代小説の表現方法の基本である。そして小説の骨組みは、エゴと現実的社会との対立、戦い、調和、作者のエゴから言えば現実の秩序の征服を願うことにある」⁶。

ここに見える「エゴ」は、いわゆる近代的な、理性によつてみずからを律する個人の自己ではない。大学時代か

らモダニズムの文藝理論と並行してマルクス主義やジークムント・フロイトの理論を学んでいた伊藤にとつては、そうした理想的な個人など幻想の産物である。「正確に見るほど人間は動物だ。潔白な人間ほど自分を容赦することができない。個人の解放は必然にエゴの偽装と抑圧とを必要とする。私はそれが近代精神自体にある違和の根本だと思う」（環境と創作 一九四七年）⁷。近代の人間は、その実証科学的な視線によつて、心の奥底に欲望が荒々しく渦巻いており、それを完全に統御することなど不可能だと気づいてしまった。そうした「違和」を奥底に抱えながら、自分の「内なる声」を表現したいと考える作家は、「偽装と抑圧」によつて、「内なる声」を他者にも理解できないものに変換し、社会との調和を保つことを強いられる。こうしてフィクションを意識的に操作する技法が、近代において登場した文藝ジャンルである「小説」の特質をなすことになった。

さらに「逃亡奴隷と仮面紳士」（一九四八年）においては、「フィクション」への注目が、西洋近代社会と日本とに関する文明論的考察に広がっている。

日本人は仮面を必要としない。フィクションなどは阿呆らしいのである。フィクションなどというのは、夕方方に燕尾服を着て出かける連中のすることである。奴

隷にていさいはいらない。凄味を利かせるために、ちよつとした細工があるだけだ。それも上手にやらないと、あいつは贗物だ、と言われて仲間はずれにされる。／＼ヨーロッパではそうでないらしい。燕尾服も手袋も必要だ。(中略) 贗物の苦惱、紳士の仮面をかぶりながら自分を卑しい動物だと考えること。偽善者の苦惱。自由な社会とは偽善的俗物の集りだと思ひながら、どうしてもそこから脱出することできない、名士な踏会である。正直なものはいやになる。彼等にとつての現実とはフィクションである。紳士淑女がたの自由な社会の心理小説とはそういうものだ。〔十六―翌〕

これは西洋の近代小説の特徴を述べた文章ではあるが、近代西洋の「自由な社会」の実像をシニカルに解剖した記述にもなっている。これに対して、伊藤の見るところ、近代の日本社会には、フィクションとして「作為されたもの、抽出され観念化されたもの」をめぐる風潮が欠如している。そこでは「実践された生活、常に事実として確かめられるもの」のみが「高い人間的感動」を呼ぶのであり、「貧弱な資源と悪質の社会制度の中で奪い合つて生きる現世」や「現世の権力と必ず結びついている文化的社会」に密着した作品しか、尊ばれない。したがって日本の小説は、作者

自身の「自由なエゴ」を純粹に保つ場所を確保するために、実社会から離脱してひたすら自分一人の生活報告を綴るだけの「逃亡奴隷」の文学になってしまふ。——この評論は太宰治の死にさいして、太宰などはそうした「逃亡奴隷」の典型にほかならないときびしく批判するものでもあつた。フィクションの自覚的意識の有無によつて西洋近代社会と日本社会を対比する議論としては、丸山眞男の論文「肉体文学から肉体政治まで」(一九四九年)におけるそれが有名である。そのなかで丸山も、西洋近代小説の本質を「フィクション」性に見て、ヨーロッパの社交生活を例に挙げながら、社会制度と政治秩序を人間が主体的に創るものと見なす「近代精神」とは、「フィクション」の価値と効用を信じ、これを不断に再生産する精神」にほかならないと指摘したのである。これは、丸山が戦前・戦中の荻生徂徠研究において近代精神の特質としての「作為」の論理を強調したことに関連する発想であろう。だが、近代社会における社交生活や小説の性格をも視野に入れて、「フィクション」の精神を強調するのは、この論文が初めてである。ひよつとすると、ほぼ一年前に発表された伊藤整の「逃亡奴隷と仮面紳士」がヒントになつたのではないだろうか。

また、伊藤整と丸山眞男とが名前を並べた書物としては、

『近代日本思想史講座』の前に、『岩波講座 日本文学史』(岩波書店)がある。伊藤は「紅葉と露伴」(一九五八年)を第十二巻に、丸山は「近代日本の思想と文学」(一九五九年)を第十五巻にそれぞれ寄稿している。丸山の論文は、一九三〇年代のプロレタリア文学における論争を題材にしながら、政治と文学との関係を幅ひろく論じた仕事である。そのなかには、マルクス主義理解の浅さを批判する文脈ではあるが、伊藤の評論集『我が文学生活』(一九五〇年)に収められた「逃亡奴隷と仮面紳士」に見える回想「²⁸⁸」を引いた箇所がある。

さらに丸山は、科学的・合理的思考の性質を論じた長い注の末尾で、「科学観と他者意識との、従って市民意識との連関を歴史的にたどる」という問題を、将来にむけた課題として提起している。²⁸⁹それは、伊藤整が雑誌『思想』に載せた論文「近代日本人の発想の諸形式」(一九五三年)で、日本社会では前近代以来、現代に至るまで「各職業はタテに階層的に区分され、横の社会人市民としての連絡がなかった」²⁹⁰と指摘したことと呼応している。そこには、「社会的他者の認識による社会的組み合せ」²⁹¹「²⁹²」、他人を認識することによって始まる多元的な社会意識、市民意識」²⁹³が成立する余地がない。——おたがいを「他者」として認識する「市民」どうしが平等な

関係を結び、フィクションとしての制度を媒介にして、さまざまな相互交渉をくりひろげること。そうした「他者意識」に立脚した近代社会のイメージを、伊藤と丸山とは共有していた。それは、戦後初期にあった思想史研究と文学史研究との、一種の共同作業を通じて生まれた知見と見ることもできるだろう。

三 シニシズムと希望

しかし、近代社会に関するイメージは共有していたとしても、伊藤整がそれを眺める視線は、丸山よりもはるかにシニカルである。雑誌『近代文学』に集った文学者たちや丸山や大塚久雄に代表されるような、終戦直後の知識人による「近代精神」礼賛に同調することはない。西洋の「近代社会」と日本社会とを比較する文章も、両者を対等に並べる性格のものである。「近代日本人の発想の諸形式」においても、他面では近代ヨーロッパの思考法が人間に要求する「倫理的仮面」に、しだいに藝術家が耐えられなくなり、狂気へと向かって破滅することも指摘している²⁹⁴。

さらに、「近代」や「自由」の理念を礼賛する主張に対して伊藤が発表したのは、T・E・ヒュームの近代ヒュー

マニズム批判、ファシズム礼賛すれすれの文章を引きながら、人間には「規律と戒律」「十六―22」を求める本能のようなものが潜んでいると指摘する「中世への郷愁」（一九四七年）であり、さまざまな組織に人間が組みこまれた現代においては、「人間が自由であるという大まかな前提を疑う」「十七―四」べきだと説く、「組織と人間」（一九五三年）であった。後者の文章では、スターリン死後のソ連で激しい権力抗争が巻き起こったことをふまえて、日本のマルクス主義知識人が、共産主義の理想社会において真の自由が実現すると説くのを、徹底的に批判している。伊藤によれば、組織の時代である二十世紀においては、歴史状況によつてはスターリンのような恐怖政治も「避けられぬ悪」として了解しなくてはいけない場合が生じるのは当然なのである。

こうしたシニカルな視線の根柢には、典型的な近代社会とは異なる日本社会も含めて、すでに現代において人は、何らかの「仮面」を身につけ、自分をフィクションで飾らないかぎり生きられないという認識があるだろう。終戦直後に発表した長篇小説『鳴海仙吉』（一九五〇年に単行本化）は、伊藤自身をパロディ化したような作家を主人公にしたて、モダニズム文学の手法をとり入れた興味ぶかい作品であるが、そのエピグラムにはこうある。「鳴海仙吉とは誰

か。作者自身にちがいないとあなたは思うでしょう。とんでもないことです。鳴海仙吉は君です、あなたです。／＼一つの気の利いたことを言つてやろうと思つ時、君は鳴海仙吉です。／＼この急場を何とか切り抜けようとする時、君は鳴海仙吉です。（中略）彼は飴色縁の眼鏡をかけ、鼠色のダブルの洋服を着、革靴を持って、智慧あり顔に街を歩いていきます。君のように、また作者のように」（「五―8」）。

現代の社会においては伊藤整自身も、無数の読者もまた多かれ少なかれ「鳴海仙吉」である。しかもこの指摘自体が、「ボヴァリー夫人は私だ」というギユスターヴ・フローベールの言葉の本歌取りになつてゐる。ここまでフィクションの網に幾重にも取り囲まれたとき、人間はみずから「内なる声」の自立性に関する確信を、いかにして保つことができるのか。伊藤はあくまでも人間が置かれた条件を認識せよと説くのみで、「自由」になるべきだという理想を掲げることはない。

だが、「組織と人間」の末尾で語る文句が、そのなかでの残された希望を指し示しているようである。「我々がいかに自由でないかを知ること知らせること自体が、あるいは我々を真の自由に一歩でも半歩でも近づけるかもしれない」（「十七―四」）。どんなフィクションのなかに生き、いかなる仮面をかぶつてゐるのかを、しっかりと自覚する。そ

の姿勢を失わずにいるならば、人間は「真の自由」に近づいてゆくことができる。「かもしれない」。伊藤が最後のところで示したのは、そうした、細々とはしているがぴんと張り詰めた糸のような、ひとすじの希望であった。

注

- (1) 詳しくは、拙稿「総論 近代の思想」(荻部直・黒住 真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座 4—近代』ペリカン社、二〇一三年、所収)を参照。
- (2) 『丸山眞男集』第十六卷(岩波書店、一九九六年) 二二〇—二二二頁。
- (3) 『近代日本思想史講座 第一卷 歴史的概観』(筑摩書房、一九五九年) 八—九頁。
- (4) 『近代日本思想史講座 第三卷 発想の諸様式』(一九六〇年) 三二頁。
- (5) 前掲『近代日本思想史講座 第三卷 発想の諸様式』 三二—三四六頁。
- (6) 『伊藤整全集』第十六卷(新潮社、一九七三年) 三四頁。曾根博義の校訂・註による、伊藤整『小説の方法』(筑摩叢書、一九八九年) 二四四頁によれば、この引用箇所は評論集『小説の方法』(一九四八年)に再録されたさしに増補されたものである。以下、『伊藤整全集』全二十四卷(新潮社、一九七二—七四年)からの引用については、

たとえば第十六卷三四頁を「十六—34」という具合に、巻数・頁数を本文中に略記する。

- (7) 『丸山眞男集』第四卷(岩波書店、一九九五年) 二一〇—二一六頁。また、「福澤諭吉の哲学」(一九四七年)においては、ゲオルク・ジンメル『社会学の根本問題』(一九一七年)の第三章「社交」(Gezieltheit)を参照しながら、「フィクションこそは神も自然も借りない全く人間の産物である」と述べていた。『丸山眞男集』第三卷(一九九五年) 二〇〇頁。
- (8) 『丸山眞男集』第八卷(一九九六年) 一二二頁、一三五頁。
- (9) T・E・ヒュームに見えるファシズムへの志向については、石田圭子『美学から政治へ——モダニズムの詩人とファシズム』(慶應義塾大学出版会、二〇一三年) 第三章に詳しい。また、「人格完成」の理想に対する伊藤の懐疑を、「大正期の教養主義」から丸山眞男に至る「知識人の系譜」と対極にあると位置づけた論考として、磯田光一『伊藤整論』(一九六八年、『磯田光一著作集』第二卷、小沢書店、一九九〇年、一六〇—一六一頁)がある。

(東京大学教授)